

横浜市立大学学術情報センター

貴重書 月替わり展覧会リーフレット (157)

2024年10月の作品は
「神奈川大権現外国人遊覧」

展示テーマ

～開港後の横浜を描く浮世絵～

横浜浮世絵は、1859年の開港以降、変貌した横浜の姿や来日した外国人、彼らの生活、鉄道を代表とする文明開化に関する「モノ」を描いた浮世絵の総称である。開港以前の横浜は単なる小さな漁村であったため、浮世絵に描かれることはなかった。しかし、日本人と外国人の衝突を避けるために東海道神奈川宿から離れた場所として横浜が開港場所に選ばれ、この地は急激な発展を遂げる。全国からの商人や外国人が集まる横浜の様子は、江戸だけでなく日本全体の関心事となった。横浜の様子を描いた横浜浮世絵は、情報が限られていた時代に人々の横浜への好奇心を満たす存在であった。横浜絵の特徴は、活気と真新しさに溢れる絵画としての美しさだけでなく、新開地横浜の姿を伝えるニュース性を持つところにあると言える。

今回の展示では、開港後の外国人の姿と横浜の景色を描いた作品を紹介する。この絵が描かれた当時の景色や建物、外国人の様子が正しいものかどうか、という点で作品を分析する。



「神奈川権現山外国人遊覧」(3枚続)

江戸時代、文久元(1862)年

作者：一川(歌川)芳員よしかず(生没年不明)

版元：泉市(和泉屋市兵衛)

縦 39.5cm × 横 28cm

神奈川の権現山と、権現山の遊覧をする外国人を描いた浮世絵。権現山は明治時代初期に台場や鉄道用の埋め立てのために険しい山が削り取られたため、現在は公園になっている。この絵が描かれた当時やそれ以前は眺めの良い場所として知られており、絵の中でも権現山の山頂では望遠鏡を覗く人々が描かれている。権現山の後ろに描かれている海にはたくさんの船が浮かんでおり、開港直後の横浜の様子が窺える。

最も大きく描かれる外国人たちは、写生に基づくものではなく、アメリカの新聞「フランク・レズリー紙」(1860年6月6日号)の挿絵から採られたことが知られている。この絵だけでなく、作者の一川芳員の作品には「フランク・レズリー紙」からの引用が多くみられる。

描かれる人々の様子に注目すると、堂々と描かれる華やかな外国人とは対照的に、農夫や子守りといった日本の一般の人々が小さく描かれている。服装や顔立ちが異なる様子には、開港直後の日本が異文化と出会ったときの驚きを感じられる作品である。

展示のみどころ

～この浮世絵はフィクションか?～

「神奈川権現山外国人遊覧」の上部を見ると、地名や建物名、山の名前が書かれている。これらは実際にこの場所から見えたものなのだろうか。浮世

絵は当時の娯楽の一種として楽しまれたものであるため、作者の想像で描かれ、現実とは異なることも多い。ここでは、「神奈川権現山外国人遊覧」のどこまでが本当でどこまでが想像なのか分析していく。

まず、絵の左側にある「浄仙寺」は、「成仏寺」のことで開港当時、アメリカ宣教師の宿舎として使用された寺である。現存しており、横浜市神奈川区神奈川本町に位置している。次に、「かな川」は神奈川宿のことであると考えられ、この二つは権現山より手前、または同じくらいの距離感で描かれている。神奈川宿は現在の神奈川本町辺りである。そして、「ごんげん山」については、現在は山が削り取られ、「幸ヶ谷公園」となっている。京浜急行の神奈川駅の近くに位置しており、「浄仙寺」「かな川」「ごんげん山」は、絵と現実



に矛盾はないと言える。

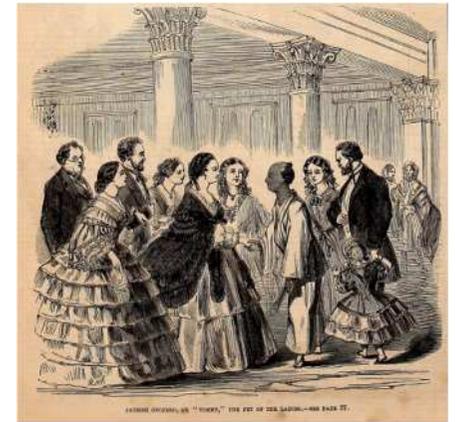
次に「よこはま」は、この絵が描かれた当時完成して間もなかった横浜港のことであると推測した。そして、絵の距離感と実際の位置を考慮すると「野毛」は当時の野毛町、「切通し」は野毛山を削った野毛の切通しのことである可能性が高い。絵の中で権現山の後ろに見える海は現在埋め立てられているが、絵が描かれた当时には海であった可能性が高い。

左の地図は、当時の海岸線を大まかに再現したものである。各山や地名の解釈が正しいとすれば、この絵にある景色は赤い矢印辺りを視点とすると、現実と矛盾しないという結論に至った。しかし、一番右に描かれる「臺下」や、「野毛」と「切通し」の間に小さく描かれている富士山のような山については候補が見つからず、作者である一川芳員の想像か、現存していないものである可能性がある。

そして、この絵を分析するにあたって無視できないのは中央に描かれる外国人たちである。彼らはアメリカの新聞紙から引用されたものであるため、実際に日本にいた外国人ではないものの、日本人に外国人の姿を正しく伝えたと言えるだろう。彼らは、近くに宣教師の宿舎として使われた成仏寺があることから、宣教師として描かれた可能性が高い。また、彼らの足元には大きな犬が描かれているが、引用元のフランク・レズリー紙にはこの犬は登場しない。開港後、日本でペットとして洋犬を飼う外国人も多く、芳員は他の作品でも外国人と共に耳が垂れた洋犬風の犬を描いていることから、宣教師

のペットとして書き加えたのかもしれない。

右の写真は引用されたフランク・レズリー紙の挿絵「御婦人たちにお気に入りのトミー」（トミーとは遣米使節団の通訳見習い立石斧次郎のこと）である。特に分かりやすいのは右側に描かれた男性とその男性にすがる少女で、「神奈川権現山外国人遊覧」でも同じような男性と少女が描かれている。



「神奈川権現山外国人遊覧」で一川芳員が描いた景色と外国人は、すべてが実際にあったものではない。

ただ、芳員の想像を含みながらも、当時の日本の人々が新開地横浜や外国人の様子を知るための情報源として、十分な作品であっただろう。

実際にあるものだけでは娯楽としての華やかさが足りない。この浮世絵は、フィクションとノンフィクションをうまく融合することで、美しさを楽しめる絵画として、そして、開港後の人々の異文化への好奇心を満たす情報源として、二足の草鞋を履いていたのである。

参考文献

- 『横浜浮世絵：集大成』 神奈川県立博物館編 有隣堂、1979年
- 『横浜市立大学 貴重資料集成Ⅲ 横浜—開国・開港』、横浜市立大学戦略的研究プロジェクト、2013年
- Internet Archive, Frank Leslie's illustrated newspaper, associate-jye-afamasaga, <https://archive.org/details/franklesliesillu00les1/page/22/mode/2up> (2023年11月1日閲覧)
- 横浜市, 神奈川宿歴史の道パンフレット, 神奈川区総務部市政推進課 https://www.city.yokohama.lg.jp/kanagawa/shokai/rekishi/syuku.files/0016_20181127.pdf (2023年10月18日閲覧)
- 歴史的農業環境閲覧システム, 農業環境技術研究所, <https://habs.rad.naro.go.jp/> (2023年10月25日閲覧)

あとがき ～貴重資料に触れて～

この絵は意外にも実際の景色と矛盾しないところが多く、外国人達もアメリカの新聞の引用をしたことで筆者の想像でないリアルな外国人が描かれている。横浜開港から出版まで約1年9ヵ月。珍しい外国人や新開地横浜の姿を当時の人々はこの絵を通して知ったことだろう。そのような貴重な浮世絵を分析し、横浜浮世絵のニュース性・娯楽性の両方を学んだ。

※コレクションの閲覧は、作品保護のため、展示品を除き申請が必要です。また利用は学術研究目的に限らせていただいております。



※過去の展示はオンラインでも公開中です！

※第158回展示は令和6年11月上旬からを予定しています。

令和6年10月1日発行
令和5年度日本文化論A受講生 編集
236-0027 横浜市金沢区瀬戸22-2
横浜市立大学 学術情報センター